

認知症サポーターの活動事例
企業・職域団体における認知症サポーターキャラバン取り組み事例
チームオレンジ取り組み事例
表彰団体一覧

部門	応募者
「認知症サポーターの活動事例」 【最優秀賞】	敦賀市立看護大学 看護学生ボランティア (福井県敦賀市) ◆看護学生が地域で実践する世代間交流を通じた認知症予防 選考理由: 認知症の当事者が自分のこれまでと現在の生活や希望等を記載していく「振り返りシート～あなたの思い～」を看護学生が考案。認知症カフェに出向いて当事者と対話しながらシートを完成させていくプロセスがコミュニケーションの場となり、認知症のある人にとって安心や自信につながる効果を得ている。 これからの医療・福祉を担っていく学生が積極的に地域の実情を学び、認知症高齢者やその家族との交流を働きかけていく実践は、地域社会に活力を与え、多世代連携の一つのあり方の提案となっている。
「認知症サポーターの活動事例」 【優秀賞】	レストランじいじ (宮城県岩沼市) ◆「男の料理教室」で得た腕前と縁を生かし 楽しみながら地域貢献に取り組む 選考理由: 地域包括支援センター主催の「男の料理教室」参加者が活動を継続し、一人暮らしになっても自分で料理をし栄養管理をすることを通して、閉じこもり防止に資する地域貢献に取り組む。 高齢のため畑や山の管理が難しくなった認知症高齢者との間を認知症地域支援推進員が取り持ち、メンバーがタケノコ掘りや山菜採りを手伝い、収穫した食材をメニューに取り入れた料理ふるまう食事会を開く。 自分たちのための料理教室から一歩踏み出し、支える側も支えられる側も食を通して日常を楽しみ地域に仲間を増やすことにつながる活動は、地域で孤立しがちな独居高齢男性の希望となっている。
「認知症サポーターの活動事例」 【優秀賞】	横浜市立もえぎ野中学校 横浜市もえぎ野地域ケアプラザ 青葉区キャラバン・メイト連絡会 (神奈川県横浜市) ◆中学校の生徒会主導の「認知症サポーター養成講座」が 地域共生の土台に 選考理由: 中学校の生徒会役員が地域包括支援センター、キャラバン・メイトとの協力、連携のもとに学内の認知症サポーター養成講座の企画・運営、事前勉強会等を主体的に実施。中学生が自ら開催手法を工夫した効果などにより、受講した生徒たちには認知症の知識だけでなく地域貢献への意識が醸成される成果を得ている。 中学生が自らなぜ、何を学びたいのか、そして地域のために何ができるのかを考え、行動に結びつく学習機会はアクティブ・ラーニングの成功例と考えられる。 同時に地域、家庭、学校が協力して地域連携が図られる実践には「認知症サポーターキャラバン」の目的と趣旨が体现されている。

「企業・職域団体における認知症
サポーターキャラバン取り組み事例」

【最優秀賞】

株式会社デニーズジャパン

◆ファミリーレストランでの「認知症本人ミーティング」を起点に
行政、企業、住民サポーターが地域で協働

選考理由:デニーズでは2020年より認知症の当事者が自らの体験や必要な支援、今後の希望などをお互いに語り合う「認知症本人ミーティング」を実施、16自治体・団体、23店舗で展開される。

誰もが気軽に訪れるファミリーレストランの利点を生かし、ごく初期の認知症当事者にとって身近な社会参加の場となっている。

地域包括支援センター、保健所、社会福祉協議会等との連携のもと認知症サポーターがボランティアスタッフとして参加するなど官民協働の契機を創出する。

認知症サポーター養成講座を受講した従業員の対応スキル向上にもつながっており、企業にも地域にもメリットが大きく、地域共生の一端を担う取り組みとして他の範となるものである。

「チームオレンジ取り組み事例」

【最優秀賞】

スマイルオレンジチーム桑園

(北海道札幌市)

◆生活から趣味まで当事者ニーズに
きめ細かく対応するチームオレンジ

選考理由:認知症サポート医をはじめ地域の医療、福祉関係者、若年性認知症支援コーディネーター、金融機関や商業施設、薬局、喫茶店、美術館まで暮らしや趣味に関わる多様な機関と綿密な連携を図っている。

メンバーにも当事者、家族のほか、民生委員や子育てボランティアなど多彩な人材が参加し、活動拠点での交流や趣味活動、ウォーキングやカフェ通いなどの外出等、当事者の希望を起点にメンバーが共に楽しみ、充実した時間をつくる工夫を続けている。

さらにチームで認知症を理解するための啓発活動も行うなど、地域づくりに必要な取り組みを発展させており、今後の継続、展開が期待される。

「チームオレンジ取り組み事例」

【最優秀賞】

チームオレンジ城西

(鹿児島県鹿児島市)

◆広報から企画まで役割分担。メンバーみなが主役として活躍中

選考理由:民生委員が把握した地域のニーズをきっかけに発足。当事者も含めたメンバーの企画提案により、特技や趣味を生かした健康麻雀、おはら節、薬膳スイーツづくりなどを楽しむ交流拠点での活動が中心となっている。

地域住民のほか保健師、管理栄養士、消防士、消防団員など多様な立場のメンバーが広報、会計、企画等を役割分担し、拠点での活動のほか外出に不安のあるメンバーをほかのメンバーがそっと見守って同行したり、活動に参加できなかったメンバーの安否確認をするなどきめ細かな対応がなされている。

ステップアップ講座は隔月で開催し、応急処置法や個人情報保護にいたるまで活動に必要な知識を学ぶ。

市ではチームオレンジの認定要領を作成し、チームオレンジコーディネーター、認知症地域支援推進員、地域包括支援センターとの情報共有によりニーズのある高齢者とチームオレンジをマッチングする体制も整えている。継続性のある盤石な仕組みづくりを図っている点も評価される。